

國學院大學學術情報リポジトリ

2022年度国際研究フォーラム「ミュージアムでみせる宗教文化」報告書

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-21 キーワード (Ja): NDC9:069.5, NDC9:160.4, NDC9:161.3 キーワード (En): 作成者: 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001632

強制収容所内の信仰と宗教

—アメリカの日系人博物館を通して考える日系人の多様な宗教経験—

エミリ・アンダーソン
(全米日系人博物館 学芸員)

はじめに

企画展、「経と聖書：信仰と日系アメリカ人の第二次世界大戦中の強制収容 Sutra and Bible: Faith and the Japanese American World War II Incarnation」はロサンゼルスにある全米日系人博物館で2022年2月26日から2023年2月19日まで博物館と南カリフォルニア大学伊藤真聰日本宗教・文化研究センターの共同企画として開かれた。

ロサンゼルス中心のビジネスマンや元アメリカ兵の日系二世が協力して、1992年に設立した全米日系人博物館は、開館以来一般来館者に日系史、特に収容所経験、を通して日系人の存在、差別経験、アメリカへの貢献、そしてまたアメリカの民主主義が掲げる多様性と、その危うさなどを訴えてきた。展示と共に何十万もの史料が保管されている。史料は個人の日系人が寄贈した一般移民の持ち物が主で、忘れられてしまった人の歴史—^{マージン}余白に置かれた人たち—を重要視している。



全米日系人博物館

宗教をどう（なぜ）展示のテーマにするか

博物館では真珠湾攻撃から収容所に至る過程を、何度も、いろいろなテーマを通して展示してきた。しかし、宗教に注目するのは今回が初めてであった。様々な展示の経験を持ち近代日本キリスト教研究を専門とする当館学芸員エミリ・アンダーソンと、仏教史が専門で日系仏教徒コミュニティとの関わりが深いダンカン隆賢ウィリアムズ（南カリフォルニア大学教授、同大学伊藤真聰日本宗教・文化研究センター、ダイレクター）が、協力しながら、日系人にとっての宗教の重要性や、どういった「もの」（史料）が存在し、どのように宗教の儀式や教えをうまく来館者に伝える事ができるかを考えた。さらに、ウィリアムズが長年の研究や調査を重ねて出版した、日系仏教徒の収容所経験に焦点を合わせた書籍『アメリカン・スートラ：第二次世界大戦における信仰と自由の物語 *American Sutra: A Story of Faith and Freedom in the Second World War*』の成果をも用いながら、展示のプランを検討し、構成した。

今では第二次大戦中に西海岸在住の日系アメリカ人おおよそ12万人（うち3分の2がアメリカ市民）が、内陸部に築き上げられた収容所に監禁され、その「容疑」は日本人を先祖に持つ事以外何もなかった事は紛れもない事実とされている。何故日系人だけがこのような圧倒的で差別的な制度の対象になったのか——例えば同じく敵国であったドイツ系やイタリア系のアメリカ人の扱いは異なっていた。そこには様々な要因があり、宗教もまた一つの重要な要因であったが、そうであるにもかかわらず、これまで十分に注目されてこなかったといえる。また、このことは、“信仰の自由”を憲法に定め、これを根本原則として掲げながらアメリカの民主主義を唱えるアメリカ人からしてみれば、理想を覆す、あってはならない差別にあたることになる。

日系人口の大多数が仏教徒であった事は差別の理由にもなった。信仰の自由が憲法で定められても、一般的にはアメリカはプロテスタント・キリスト教の国とされ、



「経と聖書」展の掲示用イメージ

南ヨーロッパやアイルランドのカトリック系移民でさえ相応しくないと恐れがちであった。黄色人種で仏教徒の日本人移民は何をしても同化が不可能な人たちとされていた。日系移民のように白人でもなく、マイノリティ宗教を「信じる」マジョリティの移民コミュニティがアメリカに現れる際、多民族・多文化・多宗教を理想として掲げるアメリカが耐えられるか。第二次世界大戦の日系人の経験、そしてその中で宗教の関わりを辿っていく事によって、日系人にとって宗教という概念の重要性、さらに宗教や「信仰」を巡る文化的・政治的価値観の働きを探る機会が与えられる。かつ、日系アメリカ人のこの辛い経験を振り返ることは、戦争のような危機的状況において、いかに多様な人種、多様な宗教の共存を守り通し、いかに権利の平等という理想を遂行できるのかという、きわめて今日的で現実的な課題を、真剣に考えることにもつながっているのである。

移民にとっての宗教の役割

明治時代に移住した大多数の日本人は仏教徒であったが、日本で暮らしていたときには、自覚的に仏教に対して宗教的な信仰を持っていたというよりは、家族や村が行う行事や儀式、葬式や先祖祭祀を行い、あるいはご利益を願うなどといった形で、仏教と関わっていたと考えられる。しかし、渡米すると異文化・異宗教を持つ者として差別を受けるようになり、今まで頼りにしていた親族やコミュニティと遠く離れた状態において、宗教団体が与える物質的・精神的な支えを求めようになった。すでに日本に宣教師を送っていたアメリカのキリスト教の教派が、アメリカ西海岸に集まり出した日系移民むけの伝道や物質的な支援を開始し、さらに日本から日本人のキリスト教の牧師が移民を追うように渡米して移民用の教会を設立するようになり、説教や伝道だけでなく英語学校や下宿など、移民が必要とするサービスを提供し始めた。仏教の各宗も、後から移民の依頼を受けて開教師を送るようになり、特に葬式など不可欠な行事を執り行い、また日本政府との連絡など重要な役割を果たすようになった。初期の移民は、出稼ぎや留学を目的として、短期間滞在する予定でいた男性が主だったが、より長く滞在する事になった人たちが日本から嫁を呼び寄せるようになり、後にはアメリカ市民権を持つ子供たちが生まれるようになった。この「二世」は人種差別を受けながらも他のアメリカ人の子供同様に学校に通い、ボーイスカウトやガールスカウトに参加し、ほとんどが英語しか話せないアメリカ人として育った。二世の数が増えるにつれて、宗教団体の側も変化の必要性を自覚するようになり、英語の礼拝や日曜学校を始めたり、地域中の二世が同じ宗教の若者と集まれる団体などを立ち上げた。

このような歴史を展示で伝えるためには目で見て内容を分かりやすく伝える写真や

史料を必要とする。例えば下掲のように独特な建築の教会や寺院、また印象的な集団写真を選んだ。



奥村多喜衛が設立したハワイ州ホノルル市にあるマキキ教会
写真：Courtesy of Mitch Homma



本派本願寺ハワイ別院、ホノルル市
写真：Courtesy George Tanabe



Japanese American Young People's Church Annual Conference, Berkeley, California, 1939.

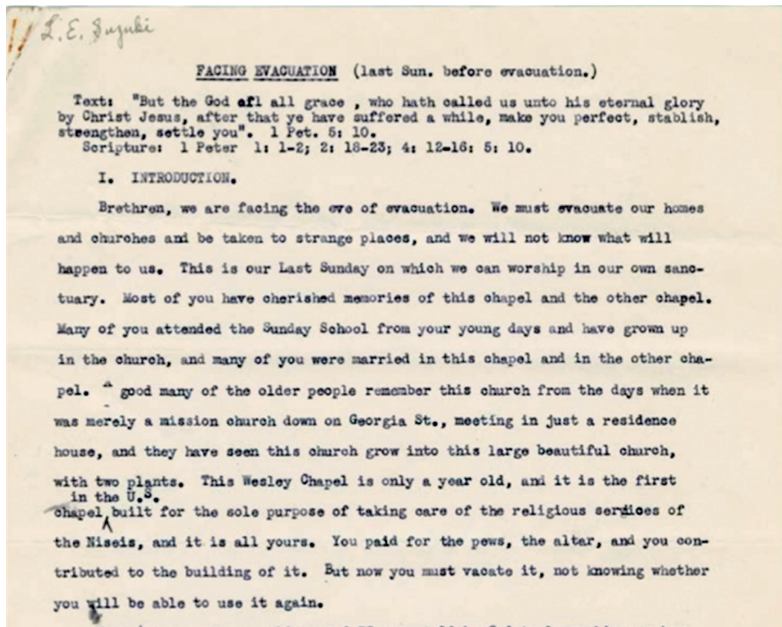
Photo: Japanese American National Museum, Gift of Rev. Sadaichi Asai (2000.354.7)

本展示に特有の課題

展示は本と違い、良い「物語」が存在しても、それを物質的に表す「もの」が存在しないと伝えられる内容が限られてしまう。例えば「経と聖書」という本展示のタイトルから明らかなように、この展示では主に仏教とキリスト教に注目した。もちろん、実際には天理教、金光教など他の宗教の信者も移民の中にいた。しかし、一般のアメリカ人の来館者に対しては、前提として天理教や金光教がどのような宗教であるのかを丁寧に説明する必要がある一方で、展示スペースには限りがある。このため、来館者が多少なりとも知識を持っているであろう仏教とキリスト教に焦点を合わせた展示とすることにした。

さらに展示のテーマを宗教に絞るとさらに展示範囲が難しくなる。例えば宗教の儀式や集まりは何かを見るだけでなく、説教を聞く、お経を読む、讃美歌を歌う、お香を焚く、といった行為をも伴うものであり、固定された展示物だけでは伝わらないものがある。宗教、また宗派の違いによって存在する史料の「面白さ」の違いも現れてくる。豪華な建物を持ち、法衣や祭服に身を包んだ僧侶・神父が、様々な道具を用いて儀式を執り行うカトリック教会や仏教と比べて、装飾を意図的に避けるプロテスタント系のキリスト教会とでは、来館者の目を引く展示できる「もの」の質が大きく異なってくる。

博物館の書庫に寄贈された貴重な史料として、プロテスタント教会の牧師たちが当時の試練にどう対応したかを表すものがある。例えば強制立ち退き直前の日曜礼拝で行われた説教の原稿である。しかし、それらは、全てタイプされた活字の原稿で、一見して目を引くようなものではない。展示してもケースの隣まで寄って原稿を読んでもみないと重要性がわからない。さらに言えば、説教は読むものではなく、聞くものである。こうしたことを考え、説教を書いた牧師たちの子孫らと連絡が取れたので、合計四人の牧師たちが書いた説教を朗読してもらって録音し、その録音を再生することによって、この「もの」を展示した。



Rev. Lester Suzuki sermon

収容生活

収容所に集められた日系人は、最低限の生活を維持するものしか与えられず、それ以上のものは自分達で作るか、探すかするより他に手段はなかった。あっという間に全てを失った人たちにとって、安定感のある生活をどう取り戻すかが第一課題だったと言えよう。この中で、宗教団体は欠かせない存在であると同時に、その宗教の教えは、突如として混乱した世界に投げ込まれた人びとに、僅かな慰めを与えたであろう。

牧師や僧侶が、収容所内での教会設立許可を貰い、毎週の礼拝や日曜学校、さらに結婚式や葬式など重要な行事を行なった。また、素人仕事によって、捨てられた木屑などから仏壇、神棚、十字架など信仰のためのものを作成した人びともいた。



果物クレートから作られた仏壇



マンザナー収容所の仏教会で行われた葬儀

ハートマウンテン須弥壇

収容所内で作られた仏壇が幾つもある中、その大きさや技術で目立つ「もの」がある。それはワイオミング州ハートマウンテン収容所で、宮大工であった西浦兄弟が作った須弥壇であり、収容所の仏教会で使うために合計4台が作られた。博物館に寄贈され、展示された須弥壇は、戦後、カリフォルニアの仏教会で長年使われていたものである。



ハートマウンテン須弥壇

「経と聖書」

様々な貴重な史料が展示された中で、特に焦点を当てた「もの」が、本展示のタイトルにもある「経」と「聖書」を代表する「ハートマウンテン経塚」と「北地聖書」である。両方とも収容された日系人が厳しい環境の中で知恵を絞り、信仰を深めるために作ったものとされる。さらに両方とも永久に失われそうになり、奇跡的な偶然の

お陰で見つかり、保存される事になった。

仏教を代表した「経」は謎に包まれたものであった。第二次世界大戦が終わり、強制収容所が閉鎖された後、そこに建てられていたバラックや土地が買収された場合があった。ワイオミング州の元ハートマウンテン強制収容所だった土地も買収の対象になり、墓地だった部分がボヴィー夫妻の手に渡った。畑にするために機械で土地を整地していたところ、いきなり機械が何かにぶつかった。作業員が機械から降りて見てみると、石油などを貯蔵するためのバレルが地中にあり、その中に入っていた何百個もの石の一つ一つに、墨で漢字が書かれていたのである。戦時中にそこで日系人が収容されていた事を知っていたボヴィー氏はバレルごとその石を掘り出し、不思議に思いながらガレージに移した。何十年もこの「謎の石」はそのまま彼のガレージに静かに保管された。以前収容されていた人たちが自分の経験をもっと知ろうと何十年ぶりに当地を訪れるようになり、ボヴィー夫妻と親しくなり、夫婦はその人たちに石を分けた。1990年代にロサンゼルス在住の日系人がハートマウンテンで使われて、まだ残っていたバラックを購入し、これをロサンゼルスに移設するために当地を訪れた際、ボヴィー氏は何百個と残っていた「謎の石」を、1992年に設立されたばかりであった全米日系人博物館に寄贈する決意をし、バラックの板と一緒に石はワイオミングを去った。「謎の石」(Heart Mountain Mystery Stones)はバラックと一緒に展示され、レプリカが博物館の売店で売られるようになった。



ハートマウンテン経塚

2001年に、愛知学院大学の森祖道教授（現在は同大学名誉教授）が、偶然ロサンゼルス在住の娘を訪問中に博物館を訪れ、「謎の石」を見た瞬間に、これは経塚ではないかと思い、その後何年もかけてこの謎を解く研究に挑んだ。博物館に寄贈された656個の石に書かれている漢字を全て記録に取り、コンピューターによるデータ解析を専門とする同僚の助けを得て検討したところ、この石一つ一つに書かれた漢字が法華経に当てはまる可能性が強いと分かった。謎をさらに解く鍵が収容されていた人たちから発見された。その中に日蓮宗の僧侶であり、ハートマウンテンの書道教室を指導した村北日鑑という人物がいたのである。森教授の何年にもわたる丹念な調査の結果、この謎の石の正体が判明した。以前の展示とは違って、今回の展示ではこれらの石を、宗教心の表れとして作成された経塚として紹介することができたのである。

特に焦点を当てた聖書も特別な歴史を持つ。後に救世軍の小隊長となる北地満寿夫は、和歌山県出身の移民で1915年、18歳で渡米。先に移住した父の店を手伝いながら学校に通った。最愛の妹の病死がきっかけで一時期失望し、酒に溺れて交通事故で重症を負った事が人生の分岐点になった。事故の現場に偶然居合わせた救世軍の人に励まされ、自分も救世軍に入団する決意をした。オークランドやサンノゼで二か国語伝道を行う過程で二か国語の聖書の必要性を感じ、自分で作成する決意をした。英訳が片方に印刷された聖書に日本語訳を手書きで加え、こまめに説明やイラストなども



北地聖書

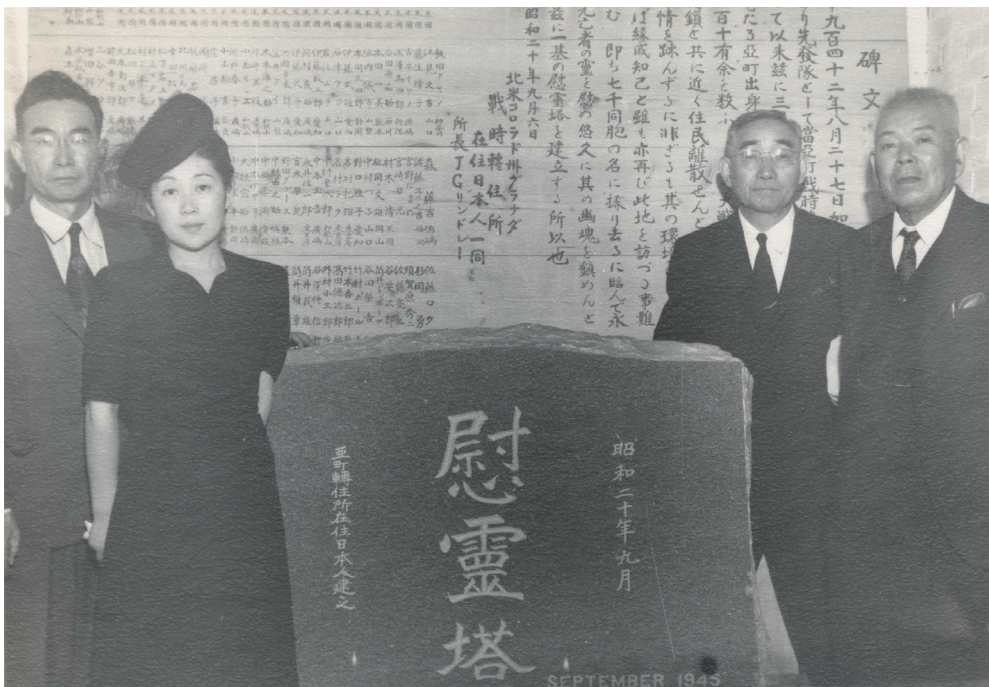
足した。北地は1935年頃にこの作業を開始し、戦争が勃発して、アリゾナ州のポストン収容所に収容されても作業を続け、1944年に完成させた。戦後さらにもう一冊の聖書の制作を手掛け、亡くなる1973年まで作業を続けた。

その後、何十年もこの2冊の聖書の行方はわからないままだった。2017年にリサイクル用のゴミ箱に捨てられているのが発見され、オークションにかけられる寸前に親族に知らされた。オークション店との交渉などを経て、聖書は親族の希望によりスタンフォード大学のフーバー・コレクションに寄贈されることになった。

アマチ慰霊塔・慰霊碑

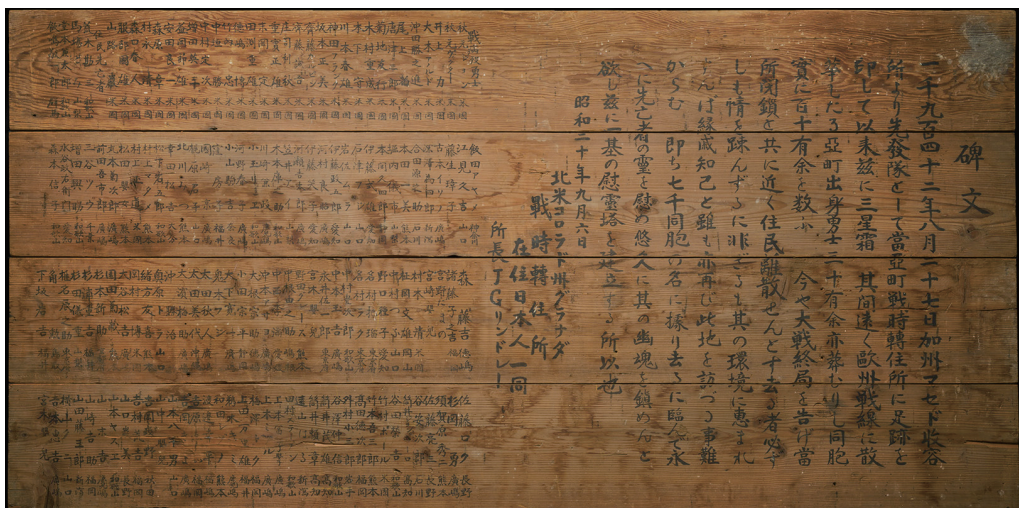
亡くなった人の霊を祀るという大切な仕事を収容所でどう行うか。収容所の閉鎖を迎えたコロラド州のアマチ収容所の住民は、その地で命を失った者、さらにそこから出兵し戦場で亡くなった日系兵士が忘れられないように、慰霊塔と慰霊碑を残した。慰霊塔に書かれた字は和田正彦牧師が手掛けた。

最後に、展示の一部として作成された「慰霊壁」を紹介したい。展示された史料の一つに、戦時中ハワイで一人残っていた日本人の開教師がハワイ出身の二世戦死者のために作った塔婆があった。この塔婆を見た展示のデザイン担当者が、収容所や抑留所の名前が書かれている塔婆で出来た「慰霊壁」の作成を提案した。博物館の近くに



アマチ慰霊塔

ある禅宗寺の小島秀明師に塔婆の作成を依頼し、日系人が戦時中収容された30ヶ所の施設を慰霊する慰霊壁が完成した。来館者の多くは日系人で、自分、または親族が収容された施設の名前を探し、その前で写真を撮るなどしており、この展示のために作られた塔婆の「慰霊壁」も大きなインパクトがあった。



アマチ慰霊碑



慰霊壁